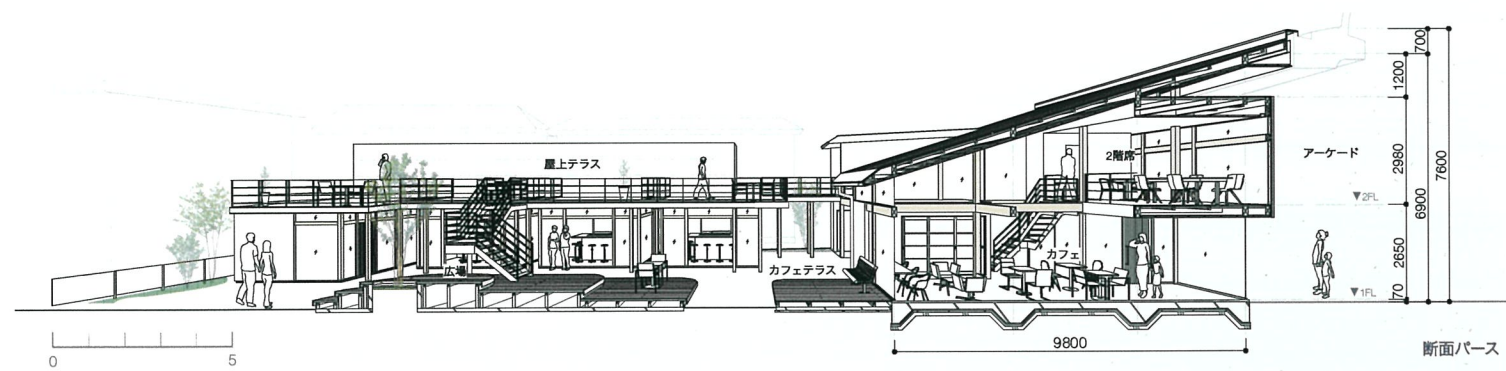
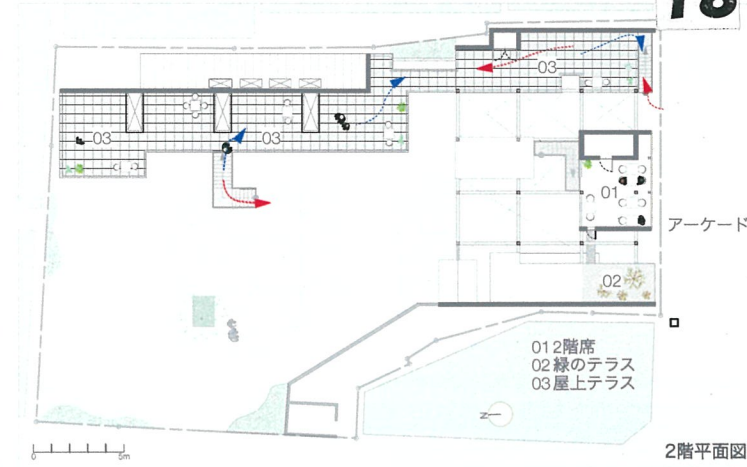
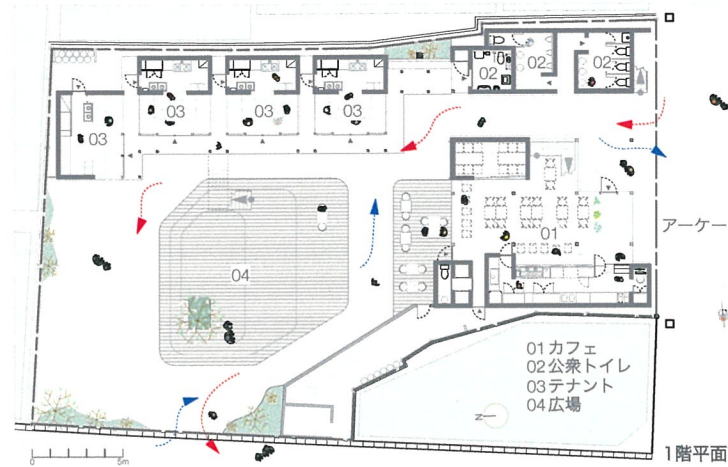


アーケード側からカフェを見る  
ファサードは一つの大きな面とならないように分割している



まちに開かれた外部空間

このプロジェクトは、四万十市が集客拠点施設の実施主体事業者を公募し、地元民間有志5人が立ち上がり、まちづくり会社を設立したことから始まった。初期投資は補助金を活用するものの、役員5人の給料や配当はなく、必要経費を除き利益は全てイベント運営や施設整備に再投資するという、個人の利益を投げ打ってまちのために手を挙げたのである。この地域に生まれ育った設計者の一人として、そんな施主5人の強い思いに同調する形でこのプロジェクトに参加した。

敷地は高知県四万十市中心商店街の一角。アーケード側にカフェと公衆トイレ、敷地奥の広場を取り囲むようにテナント4店舗を配置している。検討を重ねていく中で建ぺい率が40%、施設内外の空間に対する屋上テラスやアプローチなどの外部空間の割合も40%となって立ち現れた。これは、周辺商店街のスケール感から大きく逸脱した値である。そこに木の構造フレームを施設のデザインコードとしながら連続して配置することで、内外の空間にリズムを与え、商店街のスケール、人が寄り添えるスケールへと昇華させる要素として機能させている。

また、木のフレームとボックス空間、ガラスという単純な構成要素で組み上げていくことでアーケード側からの透明度を上げ、敷地奥の広場の視認性を高めている。そして2階までの高さを2650mmと抑えることで物理的に地上レベルと2階テラスの距離を近づけ、施設内の立体的な回遊性も高めている。

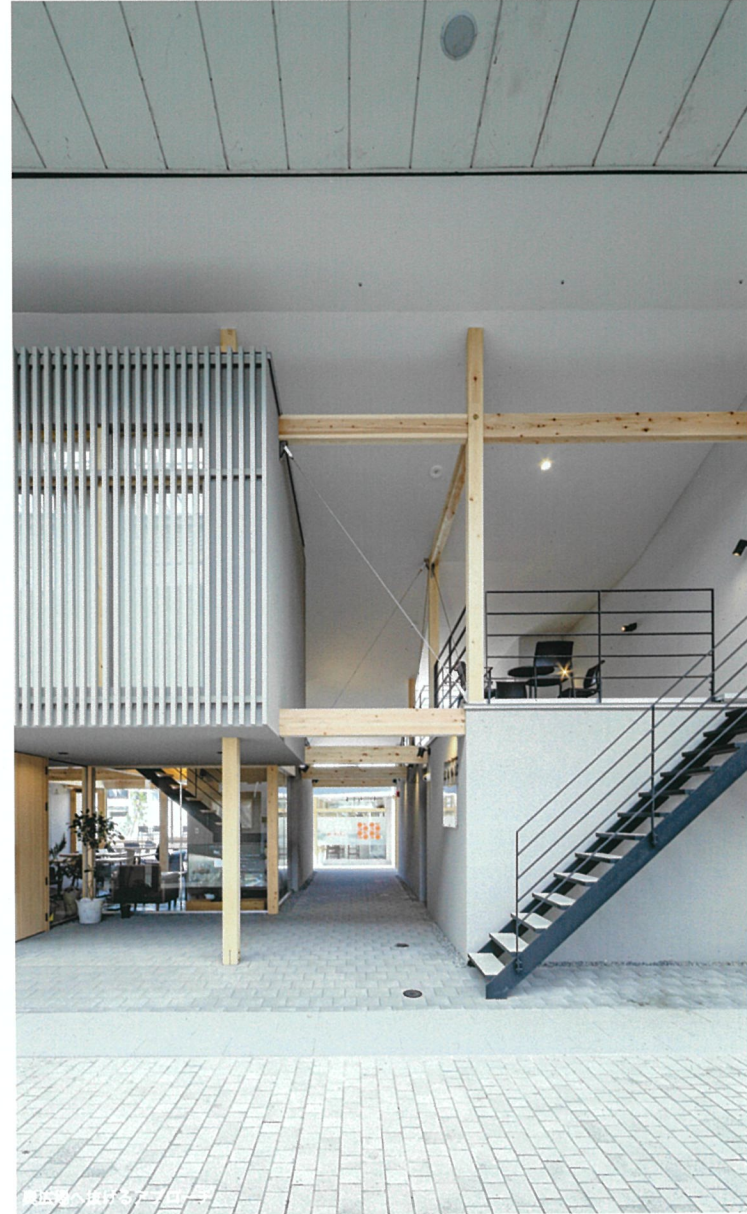
思えば、施主との対話や広場を含めた非収益部分である外部空間の設計に多くの時間を費やした。個人の利益を度外視してまちと向かい合った施主と幾度となく意見を交わし、立ち現れてきたのは、従来の収益施設とは異なる、まちの人々の居場所に包まれた純粋な公共建築と呼べる空間であった。



アーケード側全景



内部カフェよりアーケード側を見る



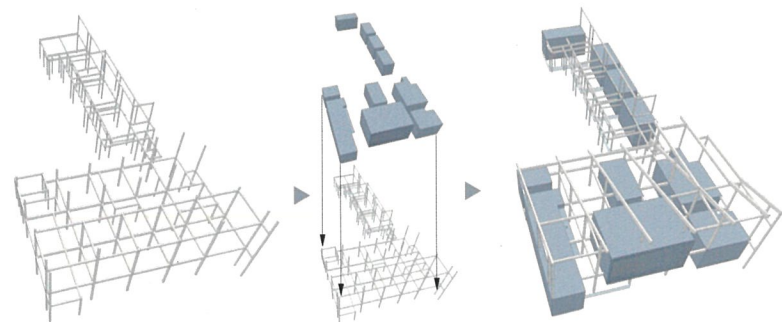
外部2階テラス



アーケードまで空がる2階テラス



広場夕景を鳥瞰より見る



構造フレーム >> 施設内外空間にリズムを与え、商店街のスケール、人が寄り添えるスケールへと昇華していく為の要素

ボックス空間 >> 構造的に最低限必要な個室は分割させながらボックス空間にまとめフレーム内に挿入させる

完成形 >> 構造フレームにより全体を繋ぎ、施設内外を同じ作り方で一貫させている。施設内外が繋がって商店街へと繋がっていく。

主な用途：飲食店	規模：2階建て	Main use: Restaurant
敷地面積：637.53㎡	構造：木造	Site area: 637.53㎡
建築面積：263.09㎡	建ぺい率：41.27%	Building area: 263.09㎡
延床面積：252.89㎡	容積率：39.67%	Total floor area: 252.89㎡